

古事記読書会

「弥栄(いやさか)の会」

2021年度第3回 報告書

開催日.. 2021年6月19日(土)

9:30 ~ 11:30

開催場所.. Zoomにて開催

参加者.. 6名(正会員)

内容..

(1) 参加者自己紹介

(2) 朗読

阿部國治著・栗山要編「第七集 八俣遠呂智(やまたのおろち)」第一章〜3章を、Zoomを用いて順番に輪読

(3) あらすじ

第一章 かむつどい

天照大御神のお籠りによる禍いが続き困り果てた八百万の神は、それまで自らの受持ちに熱心なあまりお互いを尊重していなかったことに気付く。天照大御神に天岩屋戸から出て頂くために、八百万の神が集まり(神集い)、真心をもって相談(神はかり)しなければならぬとの結論に達する。

第二章 おもいかね

相談(神はかり)を進めるにあたり主宰者が必要となったが八百万の神はそれぞれの受持ちがあり誰も主宰者になろうとしなかった。そこで、特に受持ちのない思兼神(おもいかねのかみ)が主宰者を引き受ける。

第三章 とこよのながなきどり

思兼神は御霊鎮めをして「常世の長鳴鳥を集めて天岩屋戸の前で鳴かせる」ことを、まずはじめに八百万の神に提案する。

(4) 読後感

○困難な問題が起き鳴かなければならない事態が生じたときに鳴き続ける「常世の長鳴鳥」の話が強い印象だった

○自分も長鳴鳥になれる、力は無いが少なくとも鳴き続けることは出来ることに気付かされた

○自らの受持ちは無いが皆の思いを兼ねて仕切りができる「思兼神」と「土木屋」の調整能力・全体を見渡す能力とが重なった。古市公威の言葉にも「土木こそ全ての知識を持つ必要がある」。全体を見て何とかしよう、というのが土木屋

○土木技術者には、担当分野以外にも広く兼ね揃え話をまとめていく力が求められる。思兼神の存在に、世の中にはそうした役目の人がいなければならぬ、と教えられた

○古事記に触れたのは小学生以来だが、短い中にこれだけの意味が含まれていることに驚いた
○今回の箇所は掴みどころが難しかった。もう一度読みたい

(5) 参考..第一章〜第13章あらすじ(文責..小林)

「受け日」(うけひ..第一章〜第四章)

第一章 なきいさち

伊邪那岐大御神の子..天照大御神、月読命、建速須佐之男命の三姉弟。父が須佐之男命に「ことよさし」として現世の国造りの使命(国土開拓)を命ずる。須佐之男命は移動中の困難に遭い、荒れ果てた現世を見て使命の尊さを忘れ、姉兄を羨み「なきいさち」状態となる。そこへ父伊邪那岐大御神が現れて叱り「神やらい」として須佐之男命を追放する。

第二章 まいのぼり

須佐之男命は反省し高天原にいる天照大御神を訪ねることを父に提案する。父は天照大御神の元で修行することに同意し立派な「まいのぼり」をするよう命ずる。須佐之男命は「みたましずめ」をして立派なまいのぼりについて覚り、現世のあらゆる穢れを背負って正々堂々と高天原にまいのぼりっていく。

第三章 いつのをたけび

天照大御神は須佐之男命の反省を大いに喜び、ひかりの神としての威厳を示し弟の心を完全な状態に整えるために男神の姿(=いつのをたけびの準備)で迎える。須佐之男命はそれを受け止めて

さらに反省する。天照大御神の光を受け須佐之男命に怪しき心が無くなり清明心になっていることがわかるが、天照大御神はその証をするよう命ずる。

第4章 うけひ

須佐之男命は天照大御神の「おひかり」に包まれ御魂鎮めを続け、無色透明になりただ「おひかり」だけになる(Ⅱうけひ)。天照大御神はさらに第二の証を立てるよう命じ、須佐之男命は御子を生むことを提案する。

「勝佐備」(かちさび…第五章～第十章)

第5章 あめのやすかは

須佐之男命は受け日の過程で見事なひかりの流れ(Ⅱあめのやすかは)を発見したことを天照大御神に伝え、天照大御神はそれが須佐之男命に見えたことを大いに喜びそこで一大事業(Ⅱみこうみ)をすることを提案する。※あめのやすのかは…課題を背負っているものの「いのち」本質

第6章 あめのまなる

須佐之男命は「受持ち」である現世の开拓を急ぎたいと考えるが、それに必要なものを天照大御神から問われ、「手」「太刀」(Ⅱ十拳剣)と答える。「なきいさち」の頃は「殺太刀」となっていたがこれを「生太刀」とするため、天照大御神は「あめのやすのかは」の中に入る。その中の「あめのまなる」で禊をし殺太刀は生太刀となる。

第7章 いふき

天照大御神は「あめのまなる」において生太刀に息を吹きかけ(Ⅱいふき)三人の姫御子が生まれる(Ⅱみこうみ)。

第8章 やさかのまがたまのいほつのみすまるのたま

須佐之男命も「みこうみ」をするため、十拳剣に代わるものを天照大御神に求め、天照大御神は「八尺勾玉之五百津之美須麻流之珠」を差し出す。須佐之男命はそれを受取り、「あめのまなる」におい

て「いふき」を行い五人の彦御子が生まれる(Ⅱみこうみ)。

第9章 みこのりわけ

三人の姫御子は、須佐之男命の生太刀を「ものだね」として生まれたので須佐之男命の受持ちの協力者であり、五人の彦御子は、天照大御神の珠を「ものだね」として生まれたので天照大御神の受持ちの協力者である。八柱の御子達はそれぞれ自分の名前の意味と受持ちとの関係を申し述べる。

第10章 かちさび

須佐之男命は自らの受持ちである現世の开拓に参考となる高天原の調査と勉強を始める。農業等の修行と研究に熱心に励みあまり自分の考えを試すようになり高天原の神々と衝突してしまう。

「天岩屋戸」(あまのいわやと…第十一章～第十三章)

第11章 のりなおし

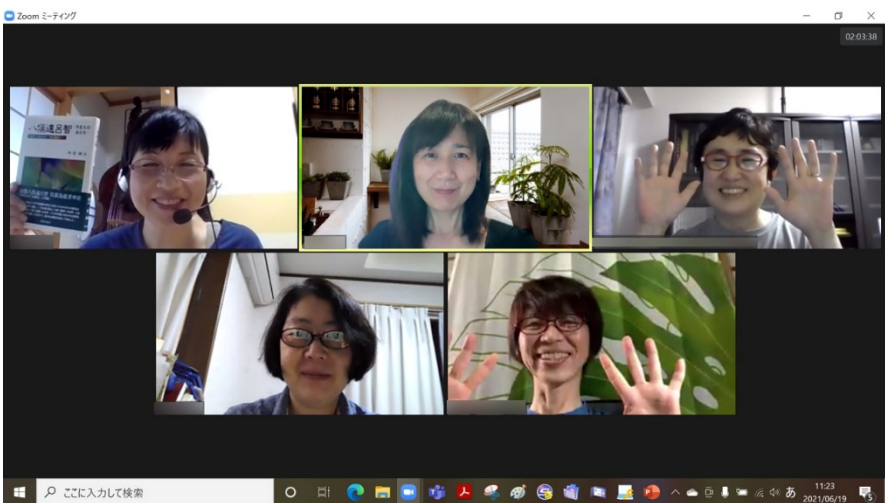
高天原での須佐之男命の行為について神々から天照大御神に苦情が殺到する。天照大御神は須佐之男命をとがめず、神々に対して、須佐之男命が自らの受持ちに熱心なあまり他が見えなくなっている状態(Ⅱ勝ちさび)であると伝え、須佐之男命の気持ちと行為に根拠を与える(Ⅱのりなおし)。

第12章 みかしこみ

須佐之男命は研究のため斑馬の皮を逆剥ぎにしさらに神々の反感を買う。天照大御神から命じられ斑馬を持参した須佐之男命は、天照大御神が機織りの最中で入り口が狭かったことから、御殿の屋根を壊して斑馬を墮とし入れる。天照大御神に仕える機織女は神に奉る織物が斑馬墮し入れによつて穢されたことを嘆き自殺する。天照大御神は責任を感じ天つ神に長い祈りを捧げる(Ⅱみかしこみ)。

第13章 おこもり

みかしこみの後、天照大御神は八百万の神と須佐之男命を呼び、機織女の死に至るまでの出来事



読後感で土木屋談義に盛り上がった後の記念撮影

の責任はすべて自分にあるため、天岩屋戸に籠ることを伝える。天照大御神の「おこもり」によって、闇夜の状態が続きことごとくの災いが起こる。

【次回予定】

2021年7月24日(土) 9:30 ~ 11:30

※次回も Zoom により「八俣遠呂智(やまたのおろち)」を味わう予定

■参加申込方法

開催日前日までに、下記必要事項を記入の上、メールにてお申し込みください。

【必要事項】 所属支部、氏名、緊急連絡先(携帯)

【申込先】

reading-circle@womencivilengineers.com

(担当:小林)

以上